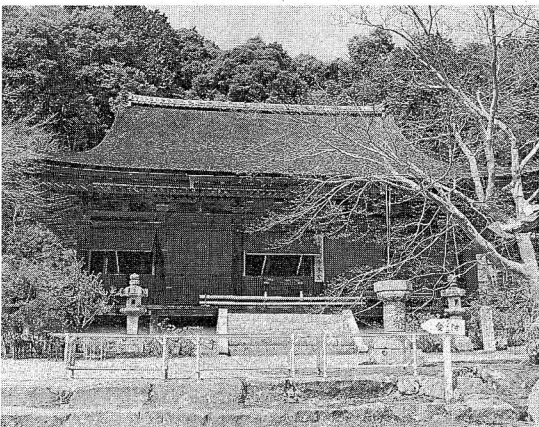


滋賀県は、仏教美術、特に優れた仏像の宝庫と呼ばれています。中でも、重要文化財に指定されている薬師如来の数は45件もあり、全国で最も多い数となっています。そして、それらの多くが、平安時代にまでさかのぼる古仏であることも特徴です。

それでは、なぜこのようにたくさん薬師古仏が近江に伝えられているのでしょうか？この謎を解く鍵は琵琶湖にあります。第13話で「謡曲白鬚」を紹介しました。そのあらすじは「昔、仏教を広める地を探していた釈迦が、比叡山の地を地主神である白鬚明神に求めたが、拒否され、あきらめようとしたときに琵琶湖より怒怒と薬師如来が現れ、自分は、地主神より古くから琵琶湖に住んでいる主であるか、釈迦に比叡山を譲る約束をした」という物語です。この話のように、琵琶湖から薬師如来が出現する話が数多く伝えられています。例えば、大津市聖衆来迎寺に伝えられている「鍔鋌薬師如来立像」は、琵琶湖から出現したと伝えられています。また、安土町桑実寺の

「桑実寺縁起」では、天智天皇の姫の病を癒やすための祈願に因って、琵琶湖より薬師如来が現れ、これを桑実寺の本尊として祀ったとしています。なぜ、薬師如来は琵琶湖から出現するのでしょうか？謡曲白鬚は、比叡山延暦寺の開基のいわれを語っています。聖衆来迎寺も桑実寺も天台宗の古い寺院です。また、今に伝えられている薬師如来の由来をたずねると、木之本町鶏足寺伝来の薬師如来のように、その多くが天台系の寺院、それも琵琶湖を取り巻く山に建立された寺院とのかわりを持つ仏が多いことに気がきます。どうやら、琵琶湖、薬師如来、天台宗には深い関係があるようです。平安時代後期の歌謡集「梁塵秘抄」には、琵琶湖を次のように表現しています。「近江の湖は海ならず、天台薬師の池ぞかし」すなわち、平安時代の人々は、琵琶湖を天台宗の根本如来である、薬師如来の

多数の薬師如来古仏



桑実寺の本堂—安土町

浄土と意識していたことがわかります。

そして、この琵琶湖と薬師如来の関係を体系付けたのが、第20話で紹介した伝教大師最澄であると考えています。最澄は「三津首百足(ももちり)」の子であり、水を祈る対象とするのが、彼の理想を成就させるために、不可欠な要件だったのでなかを、仏教により日本に安寧

延暦寺の根本如来として選んだのが薬師如来です。薬師如来の本当の名前は「薬師瑠璃光如来」。瑠璃の光とは「水の光」です。すなわち薬師如来は清らかな水の世界の盟主なのです。なおかつ、薬師如来が住まう浄土は「東方浄土」とも広がっています。比叡山の東に広がるのは「琵琶湖」です。最澄にとって、水に祈り、水の力を得るための聖地として、東方に生命あふれる琵琶湖が広がる、比叡山の地を選んだことは、いわば必然だったのかも知れません。ただ、最澄が初めて琵琶湖を「浄土」として位置づけたわけではないと思います。それ以前から近江には、琵琶湖を神の住まう所として神聖視するアニミズム的な心象が根付いており、これを最澄が仏教の世界に再編したのでしょう。そして、琵琶湖に注ぐ水の源である山々に、次々と山寺が建立され、「三」は、「水のカミ」である薬師如来が安置されたのです。このことが、近江に特異的に多く残る薬師如来古仏の秘密なのですよ。この水のコスモスとも言つべき世界をプロデュースした最澄の名に「澄」の字が含まれていることにも、深い意味があるのではないのでしょうか。

清らかな水の世界の盟主

(財団法人滋賀県文化財保護協会 大沼芳幸)